



中村俊定文庫  
文庫 18  
54  
5





了鹿集追加

全





馬廐集追加

殷勤集



馬廐集五卷の苗小長式子  
 作之式しうしうよりんと和歌  
 北浦浪よよせ月と筑波山  
 のひけみわらひてらるる長  
 五井里のよあそむあつ事  
 ひうし式しうしうのまありく能  
 借とをもてあそひよのがわい  
 とまんとそと良御とそしうしう  
 あつれきしうの音聖家しうしうに臨  
 溺せん事とあつれきしうめえ  
 仙門の戦場よのそあつは是  
 惻隠のふとそと小孺子乃



井小おら入と怵惕を

ありそもくあつらひさ  
延在芸岡の風か  
天曆は梨葉のか  
けさるゝまたらひて正  
風は事いりあよとよどす  
かく美神れくらつさひまえ  
貴賤屋しくよひたりれ  
あさまねるは代の俗をか  
風とつらひるは聖を明  
徳よふらとや撰集乃事  
初めて平教友子集とそら  
あふらふのひさしあふ  
あれさつらひるよのみさく

板りしはらとけはいつあまや  
みくらぐらき屋にありて  
子の親れ此とあけ才子師  
れ謬と難と乞又他門の彼  
羅魔魅れ障悪はあらり  
他孔子も過而改む様も  
それと式達後れ南とくわ  
とく練絲の苦らるゝ一黒  
なまきまをらるゝめり事  
一日雨眼れあまらひの難弱を  
みら難一も馬鹿事事せ  
られしはらとけはいつあまや  
其他つれ糟糠目くらなひよ  
れどもとらひらるゝあまざん



たと座りんおれ馬廐と

ほき式のみおとと家よ  
ひとらふふりし馬とねひ  
廐とおひくらへて崑山の瓦  
礫と元はあてよらつへと  
いふのまうらされいけ書懸  
懸と名はくらす事世方ら  
る廐りんきんとらつ事  
ゆれいそ母まそへてかく  
らつげゆらもめらつ

崑山集才二巻、花れ句中

ちうゆふ花やうまはらば  
新勅撰和歌集才六行大御云  
宗家よよ

のこしと秋のひさしはらま  
ゆらうまをばらうしは風  
とゆらとめをこせせうけ等れ  
馬廐集よみらう

才八巻女高花の句中

みまの腰やうらめく女高花  
げうきをれ毛のまよひ腰う  
らめくやとあして入らうま  
の事にして上よれけらめ  
くくうまきにえ他は句の



他心は早か、少定ちとるた  
 みろ人の腰をえぬれ、腰柄  
 と存りしとすれみしてかく  
 面あまし—とるよ—せりり  
 又女良むと、腰柄との二花の  
 中よ、そのあてて、腰とあす、  
 腰柄た—人—腰、し—あ、  
 —と、腰柄めくる、あ、う、  
 と、し—あ、く—と、  
 りよと、あ、あ、あ、あ、あ、  
 金原、さ、う、と、い、よ、ま、  
 う、あ、あ、あ、あ、あ、  
 先、也、も、る、さ、あ、あ、あ、  
 悪、う、神、の、さ、あ、あ、あ、

母あ、の、く、ろ、ろ、あ、り、ろ、  
 中、の、あ、あ、あ、あ、あ、  
 え、人、あ、あ、あ、あ、あ、  
 の、あ、あ、あ、あ、あ、  
 去、る、あ、あ、あ、あ、あ、  
 う、ら、あ、あ、あ、あ、あ、  
 又、り、—、あ、あ、あ、あ、あ、  
 又、り、す、あ、あ、あ、あ、あ、  
 腰、と、あ、あ、あ、あ、あ、  
 と、し、—、あ、あ、あ、あ、あ、  
 くら、あ、あ、あ、あ、あ、  
 又、あ、あ、あ、あ、あ、  
 梅、の、あ、あ、あ、あ、あ、  
 又、あ、あ、あ、あ、あ、



丹とわびるはゆれを日本の  
 和弁の女而花とてしるは  
 花の気了す寸其上女とい  
 かり母とてして腰くらぬん  
 半<sup>チキウ</sup>因若<sup>チキウ</sup>戯<sup>チキウ</sup>欲<sup>チキウ</sup>笑<sup>チキウ</sup>借<sup>チキウ</sup>老<sup>チキウ</sup>も  
 けくまくり勿<sup>チキウ</sup>論<sup>チキウ</sup>地<sup>チキウ</sup>といんより  
 女帝をといふは志<sup>チキウ</sup>美<sup>チキウ</sup>の好<sup>チキウ</sup>境<sup>チキウ</sup>  
 つけられ腰くらぬん一<sup>チキウ</sup>竹<sup>チキウ</sup>ん<sup>チキウ</sup>  
 万<sup>チキウ</sup>れ<sup>チキウ</sup>物<sup>チキウ</sup>を<sup>チキウ</sup>此<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>具<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>し<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>九<sup>チキウ</sup>者<sup>チキウ</sup>  
 ことといふは鼻<sup>チキウ</sup>を<sup>チキウ</sup>れ<sup>チキウ</sup>る<sup>チキウ</sup>男<sup>チキウ</sup>女<sup>チキウ</sup>  
 の道<sup>チキウ</sup>よ<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>て<sup>チキウ</sup>古<sup>チキウ</sup>境<sup>チキウ</sup>を<sup>チキウ</sup>賞<sup>チキウ</sup>  
 叙<sup>チキウ</sup>せん<sup>チキウ</sup>事<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>  
 赤<sup>チキウ</sup>急<sup>チキウ</sup>は<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>原<sup>チキウ</sup>氏<sup>チキウ</sup>如<sup>チキウ</sup>我<sup>チキウ</sup>  
 よらにのよひの口<sup>チキウ</sup>は<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>

二<sup>チキウ</sup>ま<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>よ<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>ま<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>る<sup>チキウ</sup>ん  
 け<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>も<sup>チキウ</sup>原<sup>チキウ</sup>氏<sup>チキウ</sup>如<sup>チキウ</sup>我<sup>チキウ</sup>  
 地<sup>チキウ</sup>を<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>  
 う<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>竹<sup>チキウ</sup>ん<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>に  
 一<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>女<sup>チキウ</sup>帝<sup>チキウ</sup>花<sup>チキウ</sup>は<sup>チキウ</sup>腰<sup>チキウ</sup>  
 う<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>え<sup>チキウ</sup>ん<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>む<sup>チキウ</sup>う<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>花<sup>チキウ</sup>  
 山<sup>チキウ</sup>は<sup>チキウ</sup>房<sup>チキウ</sup>原<sup>チキウ</sup>氏<sup>チキウ</sup>如<sup>チキウ</sup>我<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>花<sup>チキウ</sup>は<sup>チキウ</sup>  
 け<sup>チキウ</sup>て<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>落<sup>チキウ</sup>馬<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>て<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>刻<sup>チキウ</sup>腰<sup>チキウ</sup>  
 う<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>  
 一<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>く<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>九<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>氷<sup>チキウ</sup>を<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>  
 と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>  
 よ<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>  
 一<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>の<sup>チキウ</sup>妙<sup>チキウ</sup>言<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>  
 一<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>一<sup>チキウ</sup>あ<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>い<sup>チキウ</sup>や<sup>チキウ</sup>ら<sup>チキウ</sup>と<sup>チキウ</sup>き<sup>チキウ</sup>



ういふらうのり能いれそ  
あけとらんせんともれを  
まね毛吹多よとらん事  
よめ早りして御身に毛  
と吹疵ともむらうり  
それとらんりかろ豊  
ありそらんりそと吹  
疵とらんらんり  
之津内親王の家あり

とらん事かたよらん枝あり  
そとらん事かたよらん事  
とらん事かたよらん事  
御身に毛吹多よとらん事  
喜びとらん事かたよらん事

あらん事かたよらん事  
とらん事かたよらん事  
しとのりそとらん事  
能いれ功成り名遂げ返り  
ひとらん事かたよらん事  
支道林曰北人看書如顯  
視月南人学問如觸中窺  
白きとらん事かたよらん事  
あらん事かたよらん事  
あらん事かたよらん事  
とらん事かたよらん事  
御身に毛吹多よとらん事

身十一卷九月九日し白中  
とらん事かたよらん事



夏今和奇表才又解り節下  
多よ

久き此雲のくえみさき  
あまのりしとあやまの風  
とよあつとそよのまきけがら  
のこらしすしりけ顔向して  
あききしとよまのり  
月九日九曜とお對し  
まてく徳もやれすいひて  
よくあきしきめしけしと  
三月三日のりよ  
くまのひしりかたれや柳の酒  
とよまのりよあきし  
才十二重冬月之り中

池名よとては月のみさき  
まて月四序りつれも光  
あれよまきしとよまのり  
とらもあめ新とまきおま  
しとあつれとあつらり  
とあまのりんとすらえとお  
しと秋のまきとそよのみま  
とよまのりよとよまのり  
いとよまのりよとよまのり  
とす池月とあきとそよ  
まてあきしとよまのり  
とよまのり

日表を歌いの中

はらの神代もあきとそよまのり



山海經云豊山之鐘霜降則  
自鳴也 堀河院百首中  
此序のママ

さあはれなよのめひびく也  
あつさけしきやとらん  
とあり一白れんをねの後  
れおとあきんらむれあ  
ん事んえすりつらあ  
れあはきいふれいおね  
鏡の奇とあしくせさすら  
とりあふれいふあつさ  
他<sup>き</sup>とわか

才十二重く雪之句中

月けやびげしとゆらぎれを

け句いふ自潰やらんかの  
むむりもらうとるやあもこと  
かろこれやうに肩上望傾無  
影月二檐頭茶<sup>い</sup>挿<sup>か</sup>不<sup>い</sup>香<sup>い</sup>花<sup>い</sup>  
と去とらうて他<sup>き</sup>階<sup>い</sup>後<sup>い</sup>句<sup>い</sup>に<sup>い</sup>せ  
しんも侍らしらさうらう  
く不<sup>い</sup>使<sup>い</sup>れし<sup>い</sup>詩<sup>い</sup>の  
心<sup>い</sup>肩<sup>い</sup>上<sup>い</sup>望<sup>い</sup>め<sup>い</sup>い<sup>い</sup>舞<sup>い</sup>と<sup>い</sup>か  
たのふみかきけらうといあ  
らすはあ人れ肩上まえら  
さうら望めあうらうら  
吾<sup>い</sup>影<sup>い</sup>月<sup>い</sup>と<sup>い</sup>あ<sup>い</sup>く<sup>い</sup>と<sup>い</sup>  
傘<sup>い</sup>とい別<sup>い</sup>く<sup>い</sup>史<sup>い</sup>記<sup>い</sup>去<sup>い</sup>躡<sup>い</sup>躡<sup>い</sup>  
擔<sup>い</sup>笠<sup>い</sup>は<sup>い</sup>長<sup>い</sup>柄<sup>い</sup>笠<sup>い</sup>者<sup>い</sup>



登堂有柄者謂之登堂  
又韻會云有柄曰登無柄  
曰堂云和辨母のり  
かゝるこころをふれ作ら  
本文と筆事よれらや  
分明をよめよくあつたよ  
ちのめあみとしらるむ意の  
ゆるやけり又中持のんれしく  
月影やひけさゆら登堂  
ともひこころの奥句よ  
こそなるけり又あり一  
詩よい登堂月とらと月  
影やひひてとらもさく  
中持のんとあめゆり

日堰火のり中

あつて社もよめいゆらあ  
一ふれ心さうと雲霧なる  
うたなり但是月と中用  
作とれいそ共火桶の  
小智れあ家うひひり  
おして毛とさき底と  
むらま

日千鳥れり中

浪風がそと中より  
一句れ浪風がれも  
らの中らうくあつた  
古語もも交な面白  
されもは他も朋友乃中



浪風めぬともいひか  
あつげらして我のこ徳の  
中をたふすまはらうらん  
すめれい人又用へのき  
のうかたのうとらうた  
白は集めればもめれも  
うすあつていふまのりも  
集りてとえらわて舞  
且はあつていふ武の  
の四あつていふ武の  
よのけいんごうのうとえ  
ふもり然れむくひやされ  
市井は錦とあすむる人  
あつ事とまへん然とあ

ものあつていふとみ  
あつていふ武の  
れふ章たる事とみを  
丹はさつていふとみ  
石能とのりていふと  
はも徳門の徒とあつて  
いふそのれにむけさ  
事ととみとや韓氏  
も又是よとみとや  
うつていふとみと  
害んをととみと  
うつていふとみと  
も徳人の死と玉璞  
我人の山鶴と風鳥と



さらばと云ふ事ありては  
あししてまゝにされし門  
のさしざらとまゝに多き事  
と云ふ事と云ふ事と云ふ事  
すらと云ふ事と云ふ事と  
らやけのまゝに作らば  
續との紙ひいてしつゝ  
と云ふれと云ふ事の中  
お月くもる事と云ふ事  
のころあぢき事よと云  
ひひさし事と云ふ事  
の三物の事ハははあり  
らあし獨言といふもの  
がよりあらうその書り

みくくして百理と云ふ  
る事ありと云ふ事あり  
のはな一枝の花と云ふ  
其の事よはははと云ふ  
れは其の一代の御代と云  
ふ事ありと云ふ事あり  
と云ふ事あり

兼應三年 壬午陽日



獨言

兼應三行々々めれ今りり  
立ちすふととらへ能修存  
絨筆此あしし目もをく  
東より世にたさううさ  
おれひりり光し民の戸はあき  
ふそ安き代ととるん門よ  
松竹をさううそ志あめ内六  
年世れ棚さめえたいはり  
えさうあえひまわく  
九年男佐保娘もさすの  
ふもえさふむさくさえり  
めむ(虚)うあいらるや  
ちらんとりり蓬萊のよら



人子よ六もさうして後  
 りにまじりし時粟れと  
 こらへくふくさくら月  
 日さしつゝはさきし作せし  
 あつたれおひとさくし扇  
 酒さしたる酔い先大福を  
 してゑつ茶入れ初の人あ  
 しくとれしうしあめ  
 将前書れ三物よ

一昨年長政丸より仙  
 舟送ゆつうたれ名をけり  
 事人けさきりてさうこ  
 とも思ひなりしゆらんを  
 橋とらへ今らそ名ふれ花の書  
いさな

咲ひひりそ梅れ一えさ  
 初書に仙借の道長政丸より  
 傳交しとい婦聲も合照  
 う我れ長政丸れと接と  
 りえと田舎遠回しえ志  
 せん謀るえ一城りゆり  
 されもさきとゆえせし  
 事るれい長政丸孫子とさ  
 たりん海や京音子乃  
 落書よ

ともなうし何の自ひとさ  
 めんがさきしれまともつ  
 又落書  
 接とらへらんりさやを  
 封



又は平久人のせしめ  
可きもの先きあふよのそ風ひき  
この人牛つきの鼻うりしとき  
先よつきのあつしき事おひお  
ゆれしつるやほ余未だ長歌丸  
へ發句はつりしるも長歌丸よ  
あさうちひらふんはくきとまひひ  
未だ自然の作くとしとまひく  
は人よお慰せり

笑ひひりしし梅の一枝  
誰に發句師之脇に才子也  
所此發句不用しし成  
付法なきこととてさうむひり  
連歌の發句よ花とあま

脇よ梅と云ふ發句は半  
おのりしひあつ事しとや  
花のまきとつるまきと廢棄  
此詞之さあつしと書さうぬ  
むあつめり  
多ふりし書たあつたや書れは  
は發句ひるややんあてま  
板よあつし書れははひり  
ろつあつし又高山集よ  
またりし書たあつしとや花のえん  
是い長歌丸能く定つあつし  
白とあつしあつし安野又高山



集れ句とぬきありあか人の  
句よ

さふそみあかやあつるあふれん  
伊ろりるるさげあつるといふれ  
人解讀有字書不解讀無  
字書先彈有弦琴不知  
彈每弦琴以迹用不神  
用何以得琴書之趣平禰  
諧亦然矣

いふまゝに教句脇

まゐりあめい紅梅のさめ季吟  
色まぬ梅といはくる半句之  
とせうにせしと他ん長歌  
れととといり昔の下し

長歌れいひうひまくさそえに  
とくは母さめ何とやと  
やろーまたえまーさそや古  
詞とあり

學之道嚴師為難師嚴然  
後道導道者然後弟子知  
教學又曰高才弟子内匠所  
之過外揚師之善と然く  
何ぞ彼れやして師め教ると  
ハ師才此道はあつて又師の  
教實はれうしハ才子れ思よ  
あつすや三業の学不如三業  
擇師といふるこゝの書も  
又ささう漢字能門の飛人



丈夫能循蓮式流和れは心  
 約千尋れ濱の志妙たりと  
 能く道ゆつり笑しといともあり  
 うるふ人といへ物吟の自詠者  
 ひくこと強めたり千句といひ十  
 百韻れ仕積るると言ふ方と  
 又あ耐の能く付やう丸成を  
 法とよきといへかいつくき  
 ると嫌んせしといふまかり  
 獲れりくらん友と笑つるを  
 いたりゆふ人といふ身はさかり  
 くれか京童子れやせしは  
 今も大海の奈入にむろく  
 して店れあさんといふ

せり 知<sup>ラ</sup>為<sup>ラ</sup>知<sup>ラ</sup>不<sup>ラ</sup>知<sup>ラ</sup>為<sup>ラ</sup>不<sup>ラ</sup>知<sup>ラ</sup>是<sup>ラ</sup>  
 知<sup>ラ</sup>

紫花れ者ふの智道佛の世に  
 母れ亦五回忘退者といふの  
 同建と下忍のといふ母を  
 亦亦年の男地獄よれと  
 ありし不孝れも自註よ  
 尺八よ乳とあつぬと能く  
 自娣せさうといふ人も  
 自註のいふ事と云ふか  
 れ人のいふは自娣よ二れ  
 得ありといふ人自娣の  
 もあつ佛陀も捨たまふと  
 自註よ書くといふ也とあり



けりてゐる母のあれといふ約は  
 んはぬ事之非明佛陀も  
 こそ後へ一土佛の水より  
 とそ扱ふ彼日傍よ二乃ん  
 ありとよ千里れ過るる一  
 樂しと娘よとの事なま一  
 直し有不知年之舞下是  
 く踏者者ゆれ

一字ふ歳而有詩之者以詩家  
 志趣一偏不参而有禅味者  
 悟禅教玄機

腸

春に野寺に鐘をくくし

才三

春よりよる道人のんさうりて  
 自領ふ能借れ才三は立やうか  
 やうをさうりてやせんと言ふ  
 ころこありとらへも寺よ不  
 是あり兼用れと言九思一言  
 又らうめ加多古土と板切  
 一めんさうりて

脹満や針も茶もさうりん  
 ころたもさうりてさから  
 此の志さうりて付よる花  
 人の中さうりて下さる  
 親れさうりて中此ありさうり  
 とさうりてさうりて  
 米のぬれつさうりて



うそつりし衣果は

半は飯と付し石鉢

引鉄は揚川の山風

能くさしはふたは

の連歌と云ふ

うめあてのれいも春雨

なまこころはくづり

きりきりまはれ

しとくはくはくは

くそくはくはくは

くそくはくはくは

くそくはくはくは

くそくはくはくは

くそくはくはくは

茶臼と付く

くそくはくはくは

ひろくはくはくは

扇子と付く

鴉片百類は

源氏大部の物

はくはくはくは

ありはくはくは

かきと付く

他も百類は

法も百類は

式も百類は

茶臼と付く

茶臼と付く



又付れ三百ふこころとあつて  
 くとるをさすめれいり程も  
 連致ふくろしむるをさるあり  
 らある人百韻の獨吟より原  
 氏を斗せし程と程也云  
 一換れ時海氏おひくと平家  
 の名はれやうなると自あつ  
 ーと也

又十百韻才一の教句  
 第も三百れ馬代と和まけ  
 三百れ馬代とさけらとさる  
 半うくくりさよまのー者  
 三日里とさけらとさる  
 と轉とさ母ありとさ三光

又考く又漢を和書とす  
 るをけしきりあつたれいの  
 他は漢言と入能借とさる  
 けのみ事くあつて是をたとの  
 能と流とすつこの能は漢  
 言よりい流や能やこれ  
 ましきやさあつた能借と  
 漢とせしきりまよるよま  
 けあつて一之文能借をんを  
 能借俗言と入一とさるや  
 この能と能とさるよまをこれ  
 ましきり入能借をさし  
 たあつた能借と能借と  
 能借とありしとありつと



よまゝに連続する一かく  
のこゝれ自稱のむく之他  
借法志の事と書る  
はくかゝる事と書る  
あゝと云ふことばは得探と  
しる人何事もしよと云ふ  
しよの事答へけりやその  
さぬるら友らひひり梅揚  
せしきんしうりの北とあるな  
らねんしと道のあらうし  
いけりめ  
山に水を。神用のことらも  
たゞ一文字流しきりあり  
おろしとあり字あり

ありとら新く三白流き  
たる懐紙あり獨吟よ前白  
み付たるぬありありしとら  
あり用付ししと付る人も  
いさよまゝに付若れひ  
月も温故而知新可為師  
不愆不忘率用舊章と  
のたぎひしよかくけりよと  
ろろる業と梓は剛あり  
初心のまゝとらんといひまゝ  
うて具獲論辨の中は  
いふよありすや天作摩訶  
可遠自他摩訶不可道めさ  
まゝとらまゝ



心法之妙  
外科之妙  
中法之妙  
外科之妙



